

我が國に於ける洋畫研究の態度

東京美術學校教授 黒田清輝

歐米の美術には、希臘系統の思想の這入つて居るのは極めて普通なこと、時代と國柄との相異に因つて多少の變化はあるも、此の思想が歐米今日の美術思想の淵源になつて居ることは否定出來ぬ事實である。即ち羅馬の美術と云つた所で其の美術にも希臘の美術が基礎になつてゐる。換言すると希臘の美術が羅馬で新奇な芽を萌ふいたと云ふだけで、只時代と國柄が異ちがうから形式が違ちがうやうになつたと云ふのみである。又中世の美術も時代が隔たつてゐる上に、彼の耶蘇教や煩鎖哲學の影響を受けたので、多少思想や形式に異つた點が出來て來たには相違ないが、併し、これとても同じく希臘系統の美術思想が其の中樞になつてゐる。又近く十九世紀に於ける佛蘭西の美術も殆ど希臘的のものだと云つて決して差支へないのである。

此の故に、歐米では、此の希臘の美術を基礎とした美術の研究法が一般に行はれてゐる。特に佛蘭西にては、所謂クラシック派マイのダビット以來、各官立の美術學校にても、其の他の私塾にても、研究の階梯若くは方法としては、此の希臘若くは希臘の系統を繼ついで居る羅馬の美術を研究することになつてゐる。「併し、然らば歐米には、希臘系統の美術の他に、獨創の見地から研究してゐる美術が無いかと云ふに、开は然らずである。即ちクラシック派以外の美術家もあつて各々自家の特性を發揮した所謂天才的個人的作品を出してゐる。而して、此等のものには却つて觀者の感興を激發する趣味の多いものが尠くないけれども、然かも其れも仔細に考へて見れば當の社會を

離れて産れることが出来ぬのだから、苟も其の社會——時代に希臘の美術思想が瀰漫してゐる以上、亦全く此の空氣を呼吸して産れぬ譯には行かぬ。故に、希臘美術の影響を受けぬ獨創的のものと云つた所で、开は唯比較的の意味から云ふ話で、實の所、該の系統を受けて學んだが、其れに多く感染しなかつたと云ふまでのことに過ぎないのである。其處で、我が日本の洋畫に就ての問題であるが、即ち我が日本の洋畫も、矢張西洋と同様希臘の系統を引いたものを基礎として發達して來たか、又は發達せしめねばならぬか、又は他に研究方法の據るべきものがあつて、其れを杖にして進めねばならぬかと云ふ問題が起らぬでもない。故に自分は、其れに就て少く感ずる所を左に述べて見やう。

で、我が日本に於ける洋畫研究の順序としては、先づ第一に、人體を寫生すると云ふことを基としなくてはならぬ。其處で、人體を寫生するに就ては、最初より實物即ち特長ある日本人に就て寫生を試みなければならぬかと云ふに、これを必ずしも然うでないのみならず、實物に就くと云ふことは、一寸不便も伴ふ上に、進歩の上から見ても六ヶ敷いから、矢張西洋に行はれてゐる順序に習つて、希臘羅馬の複製物を基として、其れに據つて形を覺えて行くと云ふ風にするが最も便利な方法であらうと思ふ。

所で、右の如く複製物——即ち希臘美術に依つて學び始めるとすれば、其れ等のものゝ形、趣味と云ふものが知らず知らずの間に、學者の腦裡えなごものに浸み込んで、其れが、遂に、一種の固疾的なものになり、飽くまで我が日本人の腦裡から離れぬと云ふことになりはせぬか、然うなれば、我が國の作家の製作は純希臘的のものになつてしまひはせぬかと云ふ問題が起つて來るが、併し、これは杞憂であつて、如何に考へても實際には然うならうとは思へな

い、何となれば、希臘と羅馬との美術は同一系統のものだと云つても、各其國土民情の上より離すことの出來ぬ特質があつて、全然同一のもので無いやうに、又羅馬と佛蘭西とが同じく同一系統の美術を受傳して居ても、各々其國の國民性的趣味思想と云ふものがあつて、全然同一形式になつて居らぬやうに、其の他、獨乙にしる、英吉利にしる、以太利にしる、各同一系統の希臘美術を汲んで居ても其れが自家のものとして現はれる時には、各其の國土の異なる如く異つた美術として生れ出づるやうに、我が國の作家が、如何に學び方の順序がクラシツクの即ち希臘美術の複製物に就いたからつて、全然其れにかぶれて了うやうな道理がない。況んや、我が國民には、國土に伴ふ獨特の國民性と云ふものがあつて、其の趣味風尙が自らクラシツクの系統の人々とは異つて居るのだから、其れを根本的に没了してしまつて、純希臘化するやうな氣支ひのあらうとは思へぬのである。故に、この點に就ては其の自然のまゝの發達に任せて置いても決して憂はないのであるが、併し、考へやうに由りては、全然心配がないとも云へぬ——と云ふのは最初研究的の態度にて、希臘美術を學んだものが、其の最初の考へを忘れてしまつたり、自己の技倆の足らない爲めに、手本にとり取り入れた複製物其のものを摸寫するのが、日本に於ける洋畫研究だと心得て了いはせぬかと云ふことである。換言すると、我が國特有の國民性に基づく根本的——純料の思想や趣味を度外視して、全然希臘及同系統式のものに眞似たものを製作するやうになつて了いはせぬかと云ふことである。凡て、事は獎勵すると云ふ場合には、兎角自然のまゝに放任して置く譯に行かぬ傾がある。即ち少しは無理をしても其の獎勵の目的とする方向に向けたいと試みるのが普通であるから、這う云ふ意味から云ふと、如上のクラシツクの複製物に就て學べと云ふことは、些か心配がないでもないが、併しこれも學ぶもの（一面作家）の用意如何

によつては決して懸念するには及ばぬのである。即ち學ぶものが、これは只我が國在來の美術に、自家獨特の發達を遂げた希臘美術の根本の思想や、形式を融和する爲であつて、決して彼等に模倣するのではない。彼等の複製物を全移しにするのではないと云ふ自覺があつての仕事になると、決して憂はないのである。故に我が洋畫を學ぶ最初の方法としては、便宜上、希臘及希臘系統の美術の複製物に就て學んで行くを得策とする。而して最後の到着點即ち吾々の理想とする所は、竟に我が國純粹の思想及趣味に基づく製作と云ふことにならなくてはならぬと思ふ。で、斯様な順序及方法で學んで行つたら、此の人體と云ふことに重きを置かなかつた從來の日本の美術に、新に希臘羅馬のものを基礎として學び得た美術が加はつて來るのであるから、當座の間、其の形式の上には幾分か希臘式と云ふ所のあるは免かれぬかも知れぬが、併し、其の將來に於ては、學び得たものが自然と自家の血液に同化して、遂には、純日本のものになり、其れが益々進歩し發達して行くことだらう思ふ。で、日本に於ては、今の所、此の順序を措いて他に可い研究方法があらうとも思へぬから、我が國現時の青年洋畫家は、如上の順序方法に據つて、先づ第一に、人體の寫生と云ふことより、漸次研究の歩を進めて、因つて以て遂には堂に入らるゝことを希望するのである。

『美術之日本』二 明治四二年六月